

開会の挨拶



E.バトジャール
モンゴル日本語教師会 会長

皆さん、おはようございます。本日は休日にも関わらず、第12回日本語教育シンポジウムにお足をお運びいただきました林参事官、基調講演をしていただきます島田先生、モンゴル日本語教育に携わっておられる先生方、おいでになられた全ての方々に、シンポジウム主催者であるモンゴル日本語教師会を代表いたしまして改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございます。また、シンポジウム開催に協力いただきました在モンゴル日本国大使館、モンゴル日本語教師会、モンゴル・日本人材開発センター、国際交流基金の皆様にもこの場をお借りしまして深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

1年に1回行われます、日本語教師たちが学びの場として楽しみに待っている、恒例事業となった日本語教育シンポジウムは、日本語教師の我々にとってはモンゴルにおける日本語教育に関する諸問題を解決するという点で、それぞれの経験や意見を交換できる貴重な場となったことは強調すべき点だと思います。また、お互いが色々学び合う勉強の場にもなり、日本と海外から招聘される日本語教育の知識と経験豊富な先生方の基調講演を聴き、学ぶ場でもあります。モンゴルの社会発展に応じて日本語教育環境も変わりつつある現在、日本語教育シンポジウムはもっと意義深くなっています。モンゴルでの日本語学習者の人数、目的、ニーズが毎年、想像以上に変わっているのです。日本語教育のカリキュラム、内容、教授法、教育方針、日本研究などに関して考えなければならないことも少なくはないです。今回のシンポジウムも日本語教師の皆さんの積極的な参加を得て、効果的な共同事業となることを期待しております。

日本語教育と研究の繋がり
-統計分析を例に-

今回は、日本から日本大学大学院総合社会情報研究科の島田めぐみ先生にお越しいた
き、「日本語教育と研究の繋がり ―統計分析を例に―」というテーマで講演していただき
ます。私たち日本語教師には島田先生の基調講演は非常に有意義なもので、日本語教師の
皆様の中には日本語を教えているだけでなく様々な研究をされている方が多く、統計分
析を例にされる島田先生のご講演を、業務や研究の一助となるとの期待を込めてお聞きし
たく存じます。

最後になりますが、第 12 回 日本語教育シンポジウムの主催機関、共催機関、後援機関、
そして何よりもお集まりいただいたモンゴル日本語教育のためを思う先生方に、モンゴル
日本語教師会を代表いたしまして改めて感謝を申し上げますと共に、このシンポジウムを
契機に日本語教育の改善が進むことを祈念いたしまして、私の開会の挨拶とさせていただきます。
ありがとうございます。

共催者代表



三本 智哉
国際交流基金 日本語専門家

皆さん、おはようございます。国際交流基金からこのモンゴル・日本人材開発センターに派遣されている三本智哉と申します。本日はお忙しい中、そしてお休みの中、この会場に足を運んでいただき、誠にありがとうございます。

今日、この場で、色々な方々とお目にかかれることを非常に楽しみにしていました。「大学など高等教育機関から今日は参加しています」という方、どのくらいいらっしゃいますか？（会場、挙手）。「初中等、小学校・中学校・高校から来ました」という人は？（会場、挙手）けっこう、多いですね。それ以外の「日本語学校や日本語センターから来ました」という方は？（会場、挙手）これもかなり多いですね。ありがとうございます。

国際交流基金では2015年、それから2018年度に国の中、それから全世界で機関調査ということをしています。これは日本語が学べる教育機関に質問をして、「どれぐらい先生がいますか？ どれぐらいの学生がいますか？」というような調査です。この調査、まだ2018年は速報値しか出ていないんですが、モンゴルでも学習者の人数がかなり増えているようです。このような状況の中で、我々日本語教師はどのように教えていけばいいのでしょうか。そのヒントになったり、解決への手がかりになったりするようなことが今日の講演の中には含まれていると確信しています。

お越しくくださった島田先生は、本日「統計」の話をしてくださいます。そして、日本語教師のためにそれを易しく伝えてくださると思います。どうしても「統計」というと、「数学。難しい。あまり好きじゃない。」というような気持になるかもしれません。みなさん、数学が好

日本語教育と研究の繋がり
-統計分析を例に-

きな人、どれぐらいいらっしゃいますか？ 「私、数学好きです！」（会場、挙手なし）え、ゼロ！？ すごいですね。じゃあ、「お金が好きな人」どれぐらいいらっしゃいますか？（会場、挙手）。すごい！ すごい勢いで手が挙がりました。ありがとうございます。お金も数学もどちらも数字を使うんですが、随分、違いますよね。なんでこんなに違うのだろうかと考えた時、やはりそれをどういうふうにするか、使う目的、使う方法というものがよく分かることが大切で、それを使うことによって自分にメリットがあると判れば、そのことが好きになるのかなと思います。

今日学ぶ「統計」というのは数学の一部かもしれませんが、「どういうふうに使えばいいのかな、こういう使い方があるんだ」ということが解ると、皆さんにとって、もうちょっとお金に近いような存在になるのではないかと思います。例えばテストの分析をしたり、学生にアンケートをしてその分析をすることは、その後、「じゃあ、これからどういうふうに教えたいのかな」ということに繋がるのではないのでしょうか。

昨年度、ここでお話いただいた嶋田和子先生は「対話」が大切だとおっしゃっていました。また「それぞれの教育機関の中や教育機関を越えた対話が必要です」ともおっしゃっていました。今年度の「統計」との接点を考えると、例えばテストやアンケートで出てきたデータに対して統計による分析をした結果は、じゃあ次にどういうふうに教えればいいのかといった「対話の出発点」になると考えられます。理論に基づいた統計分析の結果とその解釈というのは、その後を考える出発点として確かな部分が大きいと思います。また、そのような出発点を同じ学校の他の先生、いろいろな教育機関の先生が共有して話し合う、そんな対話の場を持つ必要が今後出てくるだろうと思います。そういったところで去年と今年、そして来年を繋げていきましょう。

さて、これから島田先生からご講演、そしてワークショップをしていただきますが、是非「どんなことにこれが使えるのかな、自分ならどういうふうに使ってみようかな」ということを考えながらこの時間を過ごしてほしいと願っています。ありがとうございました。